

主 日 前 晚 課

第4調

注意 譜面中、五線譜上に $\parallel\circ\parallel$ とある部分は、その音程を保ちながら、その部分の歌詞（祈禱文）が持つ言葉の自然なリズムに則って歌うことを意味しています。ただ早く歌ってしまったり、棒読みになってしまったりしないよう、気をつけてください。この聖歌譜はそのために、歌詞の意味をとることが容易になるよう漢字を多く用いて作成しています。

2023年8月 釧路管轄司祭ステファン内田 作成

司祭) われら かみ つね あが ほ いま いつ よよ
我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、



司祭) きた われら おう かみ こうはい
來れ、我等の王・神に叩拜せん、

きた われら おう かみ こうはいふふく
來れ、ハリストス・我等の王・神に叩拜俯伏せん、

きた われら おう かみ まえ こうはいふふく
來れ、ハリストス・我等の王と神の前に叩拜俯伏せん、

きた かれ こうはいふふく
來れ、彼に叩拜俯伏せん、

【 第103 聖詠 (首誦聖詠：我が靈よ主を讃め揚げよ) 】

わ が た ま し い よ お、 しゅ を ほ め え あ げ よ 。
我 靈 主 讃 揚

しゅ よ、なんぢいはあがめほめえらる。しゅ主

わ が か み よ、なんぢはいたっておおいなり。
我 神 爾 至 大

しゅ よ、なんぢいはあがめほめえらる。な爾

んぢはこおえいと いげんとをこおむうれり。

しゅ よ、なんぢいはあがめほめえらる。やま山

の だ だ あ き に み ゑ た つ う み い づ た 立 嶺 水 立



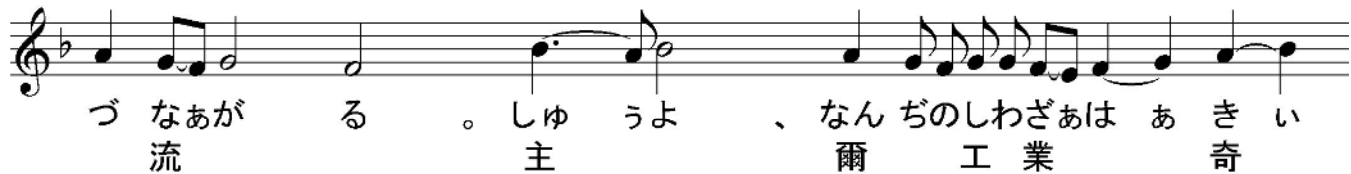
つ 。 しゅ うよ 、 なん ちのしわざあは あ き い い な
主 爾 工 業 奇 異



り 。



やまの あいだ あに い み づ な が る う、 み い
山 間 水 流 水



づ なあが る 。 しゅ うよ 、 なん ちのしわざあは あ き い
流 主 爾 工 業 奇



い な り 。



み な ち え を も っ て つ く れ り ち え
皆 智 慧 以 作 智 慧



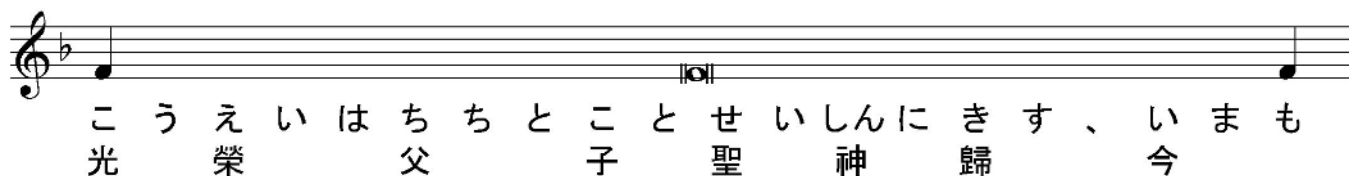
を も っ て つ く れ り 。



こ お え い は な ん ち ば ん ぶ つ を つ く り し しゅ に い き
光 榮 爾 萬 物 作 主 歸



す 。



こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も
光 榮 父 子 聖 神 歸 今



い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。
何 時 世 世

ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ、か み
神

よ こ う え い は なん ぢ に き す 。
光 榮 爾 歸

ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ、か み
神

よ こ う え い は なん ぢ に き す 。
光 榮 爾 歸

ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ、か み
神

よ こ う え い は なん ぢ に き す 。
光 榮 爾 歸

【 大聯禱 】

司祭) われらあんわ しゅ いの
我等安和にして主に禱らん、

しゅ あ わ れ め よ 。
主 憐

司祭) うえ くだ あんわ われら たましい すくい ため しゅ いの
上より降る安和と我等が靈の救の爲に主に禱らん、

しゅ あ わ れ め よ 。
主 憐

司祭) ぜんせかい あんわ かみ せい しよきようかい けんりつ およ しゅうじん ごういつ ため しゅ いの
全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の爲に主に禱ら
ん、

しゅ あ わ れ め よ 。
主 憐

司祭) こ せいどう およ しん つつしみ かみ おそ こころ もつ ここ きた もの ため しゅ いの
此の聖堂、及び信と慎と神を畏るる心とを以て此に来る者の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) 教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教ダニイル、尊貴なる我等の仙台の

大主教セラフィム、司祭の尊品、ハリストスに因る輔祭職、悉くの教衆、及び

衆人の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) 我國の天皇、及び國を司る者の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) 此の都邑と凡の都邑と地方の爲、及び信を以て此の中に居る者の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) 氣候順和、五穀豊穰、天下泰平の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) 航海する者、旅行する者、病を患うる者、艱難に遭う者、擄となりし者、及び

彼等の救の爲に主に禱らん、



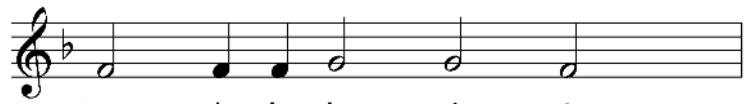
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) 我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

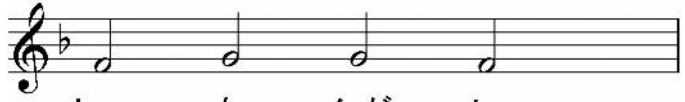


しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{しせいしけつ} 至聖至潔にして ^{いた} 至りて ^{さんび} 讚美たる ^{われら} 我等の ^{こうえい} 光榮の ^{ぢよさい} 女宰、^{しょうしんぢよ} 生神女、^{えいていどうぢよ} 永貞童女マリヤと、

^{しよせいじん} 諸聖人 ^{きおく} を記憶して、^{われらおのれ} 我等己の ^{みおよ} 身及び ^{たがい} 互に ^{おのおの} 各の ^み 身を以て、^{もつ} 並に ^{ならび} 悉くの ^{ことごと} 我等の

^{いのち} 生命を以て、^{もつ} ハリストス ^{かみ} 神に ^{いたく} 委託せん、



しゅ な んぢ に 。
主 爾

司祭) ^{けだし} 蓋、^{およ} 凡そ ^{こうえい} 光榮 ^{そんきふくはい} 尊貴 ^{なんぢちち} 伏拜は ^こ 爾父と ^{せいしん} 子と聖神に ^き 歸す、^{いま} 今も ^{いつ} 何時も ^{よよ} 世世に、

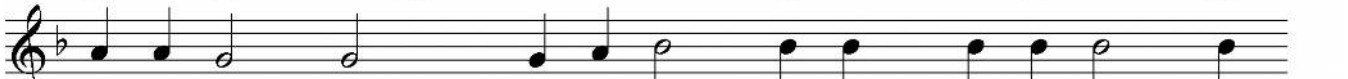


ア ミ ン。

【 第一カフィズマ 第一段 】



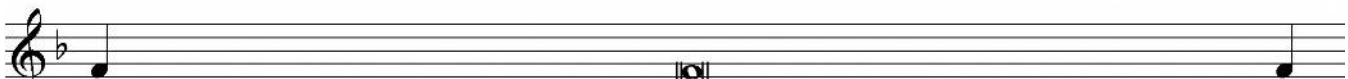
あくにんのはかりごとによかざるひとはさい
悪人謀行人福



わいなり、アリルイヤ、アリルイ



ヤ、アリルイヤ。



しゅはぎじんのみちをしる、あくにんのみちはほろ
主義人途知悪人途滅



びん、アリルイヤ、アリルイヤ、アリ



ルイヤ。

おそれしゆにつとめよ、おののきてそのまえ
 畏 主 勤 戦 其 前
 によろこべよ、アリル イヤ、アリル イ
 喜
 ヤ、アリル イヤ。

およそかれをたのむものはさいわいなり、
 凡 彼 持 者 福
 アリル イヤ、アリル イヤ、アリル
 イヤ。

しゆやたてよ、わがかみや、われをすくいた給
 主 立 吾 神 我 救 給
 まえ、アリル イヤ、アリル イヤ、
 アリル イヤ。

すくいしゆによるなんちのこうふくはなんちのた民
 救 主 依 爾 降 福 爾 民
 みにあり、アリル イヤ、アリル イ
 在
 ヤ、アリル イヤ。

こう え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今
 い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。 ア リ ル イ ヤ 、 ア
 何 時 世 世
 リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 。

【 小聯禱 】

司祭) われらまたまたあんわ ^{しゅ いの} 我等復又安和にして主に禱らん、

しゅ あ わ れ め よ 。
 主 憐

司祭) かみ ^{なんぢ おんちやう もつ} 神よ、爾の恩寵を以て、われら ^{たす すく} 我等を助け救い ^{あわれ まも} 憐み護れよ、

しゅ あ わ れ め よ 。
 主 憐

司祭) ^{しせいしけつ} 至聖至潔にして ^{いた} 至りて ^{さんび} 讚美たる ^{われら} 我等の ^{こうえい} 光榮の ^{ぢよさい} 女宰、 ^{しょうしんぢよ} 生神女、 ^{えいていどうぢよ} 永貞童女マリヤと、

^{しよせいじん きおく} 諸聖人を記憶して、 ^{われらおのれ みおよ} 我等己の身及び ^{たがい おのおの} 互に各の身を以て、 ^{み もつ} 並に ^{ならび} 悉くの ^{ことごと} 我等の

^{いのち もつ} 生命を以て、 ^{かみ} ハリストス神に ^{いたく} 委託せん、

しゅ な ん ぢ に 。
 主 爾

司祭) ^{けだしけんぺいおよ} 蓋権柄及び ^{くに} 國と ^{けんのお} 権能と ^{こうえい} 光榮は ^{なんぢちち} 爾父と ^こ 子と ^{せいしん} 聖神に ^き 歸す、 ^{いま} 今も ^{いつ} 何時も ^{よよ} 世世に、

ア ミ ン 。

【 第140聖詠 (主よ爾に籲ぶ) 第4調 】

しゅよ なんぢに よぶ すみ やかに われに いたり た給
 主 爾 呼 速 我 格 給

ま え、しゅよ われに きき たま え、しゅ
 主 我 聽 給 主

よ なんぢに よぶ すみ やかに われに いたり たま
 爾 呼 速 我 格 給

え、なんぢに よぶ と き わが いのりの こえを い
 爾 呼 時 我 禱 聲 納

れたま あ え、しゅよ われに きき たま
 給 主 我 聽 給

あ え、ねが わくは わが いのり は こうろの
 願 我 禱 香 爐

か おりの ご と く、なんぢが かんばせの まえに
 香 如 爾 顔 前

のぼり、わが てを あぐ るは くれの まつ
 登 我 手 擧 暮 祭

りの ご と く いれられ ん。しゅよ われに きき た
 如 納 主 我 聽 給

ま あ え。

誦經) しゅ わくち まもり お わくちびる もん ふせ たま わ こころ よこしま ことば かたぶ
 主よ、我が口に 衛を置き、我が唇の門を扨ぎ給え、我が心に 邪なる言に傾

きて、不法を行 う人と共に、罪の推 諉せしむる母れ、願わくは我は彼等の甘味を嘗め

ざらん。義人は我を罰すべし、是れ 矜 恤 なり、我を譴むべし、是れ極と 美 しき 膏、我

が首を悩ます能わざる者なり、唯我が 禱は彼等の悪事に敵す。彼等の首長は巖石の

あいだ さん わ ことば にゆうわ き われら つち ごと き くだ わ ほね ちごく ぐち
間に散じ、我が言の柔和なるを聴く。我等を土の如く斫り砕き、我が骨は地獄の口に
ち お しゅ しゅ ただわ め なんぢ あお われなんぢ たの わ たましい しりぞ なか
散りて落つ。主よ、主よ、唯我が目は爾を仰ぎ、我爾を恃む、我が靈を退くる母
わ ため もう わな ふほうしゃ あみ われ まも たま ふけんしゃ おのれ あみ かか
れ。我が爲に設けられし罫、不法者の網より我を護り給え。不虔者は己の網に罹り、
ただわれ す え
唯我は過ぐるを得ん。

【 第141聖詠 】

わ こえ もつ しゅ よ わ こえ もつ しゅ いの わ いのり そのまえ そそ わ うれい
我が聲を以て主に呼び、我が聲を以て主に禱り、我が禱を其前に注ぎ、我が憂を
そのまえ あらわ わ たましい うち よわ とき なんぢ われ みち し わ ゆ みち おい
其前に顯せり。我が靈の衷に弱りし時、爾は私の途を知れり、我が行く路に於て、
かれら ひそか わ ため あみ もう われみぎ め そそ ひとり われ みと もの われ
彼等は竊に我が爲に網を設けたり。我右に目を注ぐに、一人も我を認むる者なし、我
のが ところ わ たましい かえりみ もの しゅ われなんぢ よ い なんぢ われ
に遁るる所なく、我が靈を願る者なし。主よ、我爾に呼びて云えり、爾は私の
かくれが い もの ち おい われ ぶん わ よ き たま われはなはだよわ
避所なり、生ける者の地に於いて私の分なり。我が呼ぶを聴き給え、我甚弱りたれば
なり、我を迫害する者より救い給え、彼等は我より強ければなり。

句⑩ わ たましい ひとや ひ いた われ なんぢ な さんえい たま
我が靈を獄より引き出して、我に爾の名を讚榮せしめ給え。

讃詞⑩ かみ われらた なんぢ いのち ほどこ じゅうじか ふくはい なんぢ みつかめ ふく
ハリストス神よ、我等絶えず爾が生命を施す十字架に伏拜して、爾が三日目の復
かつ さんえい けだしぜんのう しゅ なんぢ これ もつ ひと く せい あらた われら また
活を讚榮す。蓋全能の主よ、爾は此を以て人の朽ちたる性を新にして、我等に復
てん のぼ たま ひとりじんじ ひと あい しゅ
天に升るを賜えり、獨仁慈にして人を愛する主なればなり。

句⑨ なんぢおん われ たま とき ぎじん われ めぐ
爾恩を我に賜わん時、義人は我を環らん。

讃詞⑨ きゅうせいしゅ なんぢ あまん じゅうじか き てい き いましめ おか ぼつ と
救世主よ、爾は甘じて十字架の木に釘せられて、木の誠を犯しし罰を解けり、
ゆうのうしゃ ちごく くだ かみ し なわめ た たま ゆえ われらなんぢ し ふく
有能者よ、地獄に降りて、神として死の縛を断ち給えり。故に我等爾が死よりの復
かつ ふくはい よろこ よ ぜんのう しゅ こうえい なんぢ き
活に伏拜して、歡びて呼ぶ、全能の主よ、光榮は爾に歸す。

句⑧ しゅ われふか ところ なんぢ よ しゅ わ こえ き たま
主よ、我深き處より爾に呼ぶ。主よ、我が聲を聴き給え、

讃詞⑧ しゅ なんぢ ちごく もん やぶ なんぢ し もつ し くに ほろぼ じんるい きゅうかい と
主よ、爾は地獄の門を破り、爾の死を以て死の國を滅し、人類を朽壞より釋
きて、世界に生命と不朽と大なる憐れみを賜えり。

句⑦ ねが なんぢ みみ わ いのり こえ き い
願わくは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。

讃詞⑦ ひとびと きた きゅうせいしゅ みつかめ ふくかつ うた われらこれ よ ちごく と がた
人々よ、來りて、救世主の三日目の復活を歌わん。我等此に因りて地獄の釋き難

なわめ のが みなふきゅう せいめい う よ じゅうじか てい ほうむ ふくかつ
き縛より脱れ、皆不朽と生命とを受けて呼ぶ、十字架に釘せられ、瘞られて、復活

ひとりひと あい しゅ なんぢ ふくかつ もつ われら すく たま
せし獨人を愛する主よ、爾の復活を以て我等を救い給え。

句⑥ しゅ も なんぢふほう ただ しゅ だれ よ た しか なんぢ ゆるし ひと なんぢ
主よ、若し爾不法を糺さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の爾

まえ つつし ため
の前に敬まん爲なり。

讃詞⑥ きゅうせいしゅ しょうんしおよ ひとびと なんぢ みつかめ ふくかつ うた これ よ ち はて てら
救世主よ、諸天使及び人々は爾の三日目の復活を歌う。此に因りて地の極は照

われらみなてき どれい のが よ いのち ほどこ ぜんのお きゅうせいしゅ ひとりひと あい
され、我等皆敵の奴隷より脱れて呼ぶ、生を施す全能の救世主、獨人を愛す

しゅ なんぢ ふくかつ もつ われら すく たま
る主よ、爾の復活を以て我等を救い給え。

句⑤ われしゅ のぞ わ たましいしゅ のぞ われかれ ことば たの
我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を待む。

讃詞⑤ かみ なんぢ あかがね もん やぶ はしら くじ つみ おちい じんらい ふくかつ
ハリストス神よ、爾は銅の門を破り、柱を折きて、罪に陥りし人類を復活せ

たま ゆえ われらこえ あわ うた し ふくかつ しゅ こうえい なんぢ き
しめ給えり。故に我等聲を合せて歌う、死より復活せし主よ、光榮は爾に歸す。

句④ わ たましいしゅ ま ばんにん あさま ばんにん あさま はなはだ
我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

讃詞④ しゅ なんぢ ちち うま とし えいきゅう どうていぢよ み と
主よ、爾が父より生ることは年歳なくして永久なり、童貞女より身を取ることは

ひとびと ため はか がた い がた ちごく くだ あくまおよ そのつかいら ため おそ
人々の爲に測り難く言い難し、地獄に降ることは悪魔及び其使等の爲に懼るべし。

けだしなんぢ し ふ みつかめ ふくかつ ひとびと ふきゅう おおい あわれみ たま
蓋爾は死を踐みて、三日目に復活して、人々に不朽と大なる憐とを賜えり。

句③ ねが しゅ たの けだしあわれみ しゅ おおい あがない かれ かれ
願わくはイスライリは主を恃まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼

そのことごと ふほう あがな
はイスライリを其悉くの不法より贖わん。

讃詞③ じゅんけつ しょうしんぢよ なんぢ ち み と ばんゆう かみ なんぢ しんじゃ ため おおい
純潔なる生神女よ、爾の血より身を取りし萬有の神は爾を信者の爲には帡幪、

かんなんきゅうはく あもの ため てんたつおよ ふじよしゃ あらし あもの ため おだやか みなと
患難急迫に在る者の爲には轉達及び扶助者、颶風に遇う者の爲には穩なる港

あらわ たま ゆえ なんぢおよ なんぢ しんせい おおい した はし つもの もろもろ うれいおよ
と顯し給えり。故に爾凡そ爾の神聖なる帡幪の下に趨り附く者を諸の憂愁及

もだえ すく たま
び煩悶より救い給え。

句② ばんみん しゅ ほ あ ばんぞく かれ あが ほ
萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ、

讃詞② ^{しふく ちよさい われなんぢ しんせい な つね とうと あが つつし ほ うた いの}
至福なる女 宰よ、我 爾の神聖なる名を常に 尊みて崇め、敬み讃めて歌わん。祈

^{なんぢ おおい した はし つ われ しょてき よろこび な なんぢ とうと きとう つばさ}
る、爾の旃幪の下に趨り附く我を諸敵の悦と爲さずして、爾の尊き祈禱の翼を

^{もつ つね われ ことごと いざない そこな もの まも たま}
以て常に我を 悉くの誘惑より損われざる者として護り給え。

句① ^{けだしかれ われら ほどこ あわれみ おおい しゅ しんじつ なが せん}
蓋 彼が我等に施す 憐は大なり、主の眞實は永く存す。

讃詞① ^{しじょう かみ はは よろこ しんじゃ たのみ よろこ せかい きよめ よろこ なんぢ しょ}
至 浄なる神の母よ、慶べ、信者の倚頼よ、慶べ、世界の潔淨よ、慶べ、爾の諸

^{ぼく もろもろ うれい のが もの よろこ し ほろぼ せいかつ あた もの よろこ}
僕を 諸の憂愁より脱れしむる者よ、慶べ、死を滅して生活を與うる者よ、慶べ、

^{なぐさ もの よろこ てんたつしゃ よろこ かくれが よろこ}
慰むる者よ、慶べ、轉達者よ、慶べ、避所よ、慶べ。

【 ドグマチカ (生神女讃詞) 第4調 】

こう えい は ち ち と こ と せ い しん に き す 、 い ま も
光 榮 父 子 聖 神 歸 今

い つ も お よ お よ に 、 ア ミ ン 。
何 時 世 世

し ょ う し ん ぢ ょ よ 、 なん ぢ に よ り て か み の せん ぞ と な 爲
生 神 女 爾 因 神 先 祖 爲

り し よ げ ん し ゃ ダ ヴ ィ ド は なん ぢ に お お い な る こ と
預 言 者 爾 大 事

を な し し も の に 、 な ん ぢ の こ と を う た い
爲 者 爾 事 歌

て よ べ り 、 に よ お う は なん ぢ の み ぎ に た て
呼 女 王 爾 右 立

り と 。 け だ し ち ち な く なん ぢ よ り あ ま ん じ て
蓋 父 爾 甘

ひとのせいをとりしかあみハリストス、おおい
 人 性 取 神 大
 にしてゆたかなるあわれみをたもつしゅは
 裕 憐 有 主
 なんぢははをいのちのちゅうほしやとあらわせ
 爾 母 生 命 中 保 者 現
 えり、これよくにくちたるおのれのか像
 是 慾 朽 己 像
 たちをあらたあめ、やまのなかにまよい
 改 山 中 迷
 しひつじをえて、かたにおき、ちちのま前
 羊 獲 肩 置 父 前
 えにたづさあえ、おのれのむねにかな
 攜 己 旨 協
 わせ、これをてんぐんにあわせえて、せかい
 之 天 軍 合 世 界
 をすくわんためなあり。
 救 爲

司祭) ^{えいち} 睿智、^{つつし} 肅 ^た みて立て、

【 聖ソフロニイの祝文 】

せいにしてふくたるじょうせいなるてんのちちの
 聖 福 常 生 天 父

せいなるこうえいのおだやかなるひかりイイ
 聖光榮お穩光
 ススハリストスよ、われらひのいりにいたりく
 我等日入至暮
 れのひかりをみて、かみちちとことせいしん
 光見神父子聖神
 をうとおう。いのちをたもうかみのこ
 歌生 命 賜 神 子
 よ、なんぢはいつもけいけんのこえにてうたわ
 爾何時敬虔聲歌
 るべし、ゆえにせかいはなんぢをあがめ
 故世界爾崇
 ほむ。
 讚

【 大プロキメン 第6調 】

司祭) ^{つつし}謹 ^きみて聴くべし、^{しゅうじん}衆 ^{へいあん}人に平安、^{えいち}睿智、

誦經) ^{プロキメン}提綱、^{しゅ}主は王たり、^{かれ}彼は威嚴 ^きを衣たり、

しゅはおうたり、かれはいげんをきた
 主 王 彼 威 嚴 衣
 り、

誦經) ^{しゅ}主は能 ^{のうりよく}力を衣、^{またこれ}又 ^{おび}之を帯にせり、

しゅはおうたり、かれはいげんをきた
主 王 彼 威 嚴 衣

り、

誦經) ^{ゆえ せかい けんご うご} 故に世界は堅固にして動かざらん、

しゅはおうたり、かれはいげんをきた
主 王 彼 威 嚴 衣

り、

誦經) ^{しゅ せいとく なんぢ いえ ぞく えいえん いた} 主よ、聖徳は爾の家に屬して永遠に至らん、

しゅはおうたり、かれはいげんをきた
主 王 彼 威 嚴 衣

り、

誦經) ^{しゅ おう} 主は王たり、

かれはいげんをきたり。
彼 威 嚴 衣

【 重聯禱 】

司祭) ^{かみ なんぢ おおい あわれみ よ われら あわれ なんぢ いの き い あわれ} 神よ、爾の大なる憐に因りて我等を憐めよ、爾に禱る、聆き納れて憐めよ、

しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またわがくに てんのうおよ くに つかさど もの ため いの} 又我國の天皇及び國を司る者の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ め よ 。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またきょうかい つかさど そんき われら ぜんにつぼん ふしゅきょう そんき われら せんだい} 又 教 會 を 司 る 尊 貴 なる 我 等 の 全 日 本 の 府 主 教 ダニエル、 尊 貴 なる 我 等 の 仙 台

^{だいしゅきょう およ お ことごと われら けいてい ため いの} の 大 主 教 セラフィム、 及 び ハリスツス に 於 ける 悉 くの 我 等 の 兄 弟 の 爲 に 禱 る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ め よ 。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またつね きおく ふく こ せいどう こんりゅうしゃ およ すで ねむ ことごと ふそけいてい} 又 恒 に 記 憶 せ ら る る 福 たる 此 の 聖 堂 の 建 立 者、 及 び 既 に 寝 り し 悉 くの 父 祖 兄 弟、

^{こ ところ しょほう ほうむ せいきょう もの ため いの} 此 の 處 と 諸 方 と に 葬 ら れ た る 正 教 の 者 の 爲 に 禱 る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ め よ 。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またかみ しょぼくこ せいどう けいてい じれん せいめい へいあん そうけん きゅうしょく けんこ かんゆう} 又 神 の 諸 僕 此 の 聖 堂 の 兄 弟 に、 慈 憐、 生 命、 平 安、 壮 健、 救 贖、 眷 顧、 寛 宥、

^{およ しょがい ゆるし たま ため いの} 及 び 諸 罪 の 赦 を 賜 わ ん が 爲 に 禱 る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ め よ 。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またこ せいどう もの たてまつ ぜんぎょう おこな これ ろう これ うた およ ここ た} 又 此 の 聖 堂 に 物 を 獻 り、 善 業 を 行 い、 之 に 勞 し、 之 に 歌 い、 及 び 此 に 立 ち て

^{なんぢ おおい ゆたか あわれみ あお のぞ もの ため いの} 爾 の 大 に して 豊 なる 憐 を 仰 ぎ 望 む 者 の 爲 に 禱 る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ め よ 。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{けだしなんぢ じれん ひと あい かみ われら こうえい なんぢち こ せいしん けん いま} 蓋 爾 は 慈 憐 に して 人 を 愛 する 神 な り、 我 等 光 榮 を 爾 父 と 子 と 聖 神 に 獻 ず、 今 も

^{いつ よよ} 何 時 も 世 世 に、



ア ミ ン。

誦經) ^{しゅ われら まも つみ こ くれ わた たま しゅわ せんそ かみ なんぢ あが ほ} 主よ、我等を守り罪なくして此の晩を度らせ給え、主吾が先祖の神よ、爾は崇め讃

^{なんぢ な よよ とうと うた} められ 爾の名は世々に 尊み歌わる、アミン。

^{しゅ なんぢ たの よ なんぢ あわれみ われら た たま しゅ なんぢ あが ほ} 主よ、爾を恃むに因りて、爾の 憐を我等に垂れ給え、主よ、爾は崇め讃めらる、

^{なんぢ いましめ われ おし たま しゅさい なんぢ あがめほ なんぢ いましめ われ さと たま} 爾の 誠を我に訓え給え、主宰よ、爾は崇め讃めらる、爾の 誠を我に悟らせ給

^{せい もの なんぢ あがめほ なんぢ いましめ われ てら たま} え、聖なる者よ、爾は崇め讃めらる、爾の 誠にて我を照し給え。

^{しゅ なんぢ あわれみ よよ あ なんぢ て つく もの す なか ほまれ なんぢ き} 主よ、爾の 憐は世世に在り、爾の手の造りし物を棄つる勿れ、讃は爾に歸し、

^{うた なんぢ き こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ} 歌は 爾に歸し、光榮は 爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

【 増聯禱 】

司祭) ^{われらしゅ まえ わ くれ いのり ま くわ} 我等主の前に吾が晩の 禱を増し加えん、



司祭) ^{かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも} 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い 憐み護れよ、



司祭) ^{こ くれ じゅんぜん せいせい へいあん むざい しゅ もと} 此の晩の純全・成聖・平安・無罪ならんことを主に求む、



司祭) ^{へいあん てんし ただ きょうどうし わ れいたい しゅごしや たま しゅ もと} 平安の天使、正しき教師、吾が靈體の守護者を賜わんことを主に求む、



司祭) ^{われら つみ あやまち なた ゆる しゅ もと} 我等の罪と 過とを宥め赦さんことを主に求む、



司祭) ^{われら たましい ぜん えき こと およ せかい へいあん たま しゅ もと} 我等の 靈に善にして益ある事、及び世界に平安を賜わんことを主に求む、



しゅ た ま え よ 。
主 賜

司祭) 我^{われら}等^{いのち}の生命^{よじつ}の餘日^{へいあん}を平安^{つうかい}と痛悔^{もつ}とを以て終らん^{おわ}ことを主^{しゅ}に求む^{もと}、



しゅ た ま え よ 。
主 賜

司祭) 我^{われら}等^{いのち}の生命^{おわり}の終^{かな}がハリストティアノンに^{やまい}適い^{はぢ}、疾^{へいあん}なく、耻^{およ}なく、平安^{およ}なること、及びハ
リストス^{おそ}の畏^べる可^{しんぼん}き審^{おい}判^{よろ}に於^{こたえ}て宜^{たま}しき對^{もと}をなすを賜^{もと}わんことを求^{もと}む、



しゅ た ま え よ 。
主 賜

司祭) 至^{しせい}聖^{しけつ}至^{いた}潔^{さんび}にして至^{われら}りて讚^{こうえい}美^{ちよさい}たる我^{しょうしん}等^{ぢよ}の光^{えいてい}榮^{どうぢよ}の女^{ぢよ}宰^{ぢよ}、生^{えいてい}神^{どうぢよ}女^{ぢよ}、永^{ぢよ}貞^{ぢよ}童^{ぢよ}女^{ぢよ}マリヤと、

諸^{しよ}聖^{せい}人^{じん}を記憶^{きおく}して、我^{われら}等^{おのれ}己^みの身^{およ}及び互^{たがい}に各^{おのおの}の身^みを以^{もつ}て、並^{ならび}に悉^{ことごと}くの我^{われら}等^{われら}の

生命^{いのち}を以^{もつ}て、ハリストス^{かみ}神^{いたく}に委^{いたく}託^{せん}せん、



しゅ な ん ぢ に 。
主 爾

司祭) 蓋^{けだし}爾^{なんぢ}は善^{ぜん}にして人^{ひと}を愛^{あい}する神^{かみ}なり、我^{われら}等^{こうえい}光^{なんぢ}榮^{ちち}を爾^こ父^{せいしん}と子^{けん}と聖^い神^まに獻^{けん}ず、今^{いま}も

いつ^{いつ}も世^{よよ}世^{よよ}に、



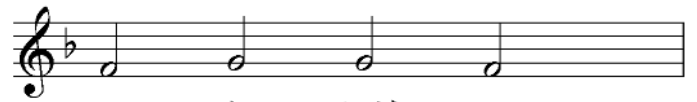
ア ミ ン。

司祭) 衆^{しゅう}人^{じん}に平安^{へいあん}



なんぢのしんにも。
爾 神

司祭) 我^{われら}等^{こうべ}の首^{しゅ}を主^{かが}に屈^{かが}めん



しゅ な ん ぢ に 。
主 爾

司祭 (黙經) ^{しゅわ かみ てん かが じんるい すく ため くだ もの なんぢ しょぼく なんぢ}
主我が神、天を屈めて人類を救うが爲に降りし者よ、爾の諸僕と爾の

^{しぎょう かがり たま けだしなんぢ しょぼく なんぢおそ ひと あい}
嗣業とを顧み給え、蓋爾の諸僕は、爾畏るべくして人を愛する

^{しんばんしゃ こうべ かが おのれ くび ふ ひと たすけ ま すなわちなんぢ あわれみ}
審判者に首を屈め、己の頸を伏し、人の助を俟たず、乃爾の憐を

^{ま なんぢ すくい あお もと かれら つね まも かれら こ ゆうべ つぎ いた}
俟ち、爾の救を仰ぐ、求む彼等を恒に護り、彼等を此の夕にも、次て至る

^{よる およそ てきおよそ あくま かんぼう むな しりよ あ いねん まも たま}
夜にも、凡の敵凡の悪魔の姦謀と虚しき思慮と悪しき意念とより護り給え、)

^{ねが なんぢちち こ せいしん くに けんべい さんようさんえい いま いつ よよ}
願わくは爾父と子と聖神の國の權柄は讚揚讚榮せられん、今も何時も世に、



ア ミ ン。

【 挿句讚頌 第4調 】

誦經) ^{しゅ なんぢ じゅうじか のぼ わ げんそ のろい ほろぼ ぢごく くだ よよ とりこ}
主よ、爾は十字架に上りて、我が原祖よりの詛を滅し、地獄に下りて、世々の俘囚

^{と じんるい ふきゅう たま ゆえ われらうた いのち すくい ほどこ なんぢ ふくかつ あが}
を釋き、人類に不朽を賜えり。故に我等歌いて、生命と救とを施す爾の復活を崇

^ほ
め讚む。

句 ^{しゅ おう かれ いげん き}
主は王たり、彼は威嚴を衣たり。

讚頌 ^{ひとりゆうのう しゅ なんぢ き か ことごと ぞうぶつ ふる はか い}
獨有能なる主よ、爾は木に懸けられて、悉くの造物を震わせ、墓に入れられて、

^{はか お もの ふくかつ じんるい ふきゅう せいめい たま ゆえ われらうた なんぢ}
墓に居る者を復活せしめて、人類に不朽と生命とを賜えり。故に我等歌いて爾の

^{みつかめ ふくかつ あが ほ}
三日目の復活を崇め讚む。

句 ^{ゆえ せかい けんご うご}
故に世界は堅固にして動かざらん。

讚頌 ^{ふほう たみ おんしゅ たい おん し もの あらわ なんぢ ぴらと わた}
ハリストスよ、不法の民は恩主に對して恩を知らざる者と顯れて、爾をピラトに解

^{じゅうじか てい ため さだ ただなんぢ あまん ほうわり しの かみ おのれ けん}
して、十字架に釘せん爲に定めたり。惟爾は甘じて葬を忍び、神として己の權

^{もつ みつかめ ふくかつ われら おわり いのち おおい あわれみ たま}
を以て三日目に復活して、我等に終なき生命と大なる憐とを賜えり。

句 ^{しゅ せいとく なんぢ いえ ぞく えいえん いた}
主よ、聖徳は爾の家に屬して永遠に至らん。

讃頌 おんあなたち なみだ なが はか いた なんぢ たづ え はげ な よ い
女等は涙を流し墓に至りて、爾を尋ねしに、得ずして、歎き泣きて呼びて曰えり、

かな かなわ きゆうせいしゅ ぼんゆう おう なんぢいかん ぬす いづれ ところ なんぢ いのち
哀しい哉我が救世主、萬有の王よ、爾如何ぞ竊まれたる、何の處か爾の生

ほどこ み かく てんし かれら こた い な なか ゆ つた しゅ ふくかつ
を施す身を隠す。天使は彼等に對えて曰えり、泣く勿れ、往きて傳えよ、主は復活して

われら よろこび たま ひとりじんじ しゅ
我等に喜を賜えり、獨仁慈の主なればなり。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、アミン。

生神女讃詞 いた きず もの なんぢ しょぼく きとう かえり た がた こうげき われら
至りて玷なき者よ、爾の諸僕の祈禱を顧みて、堪え難き攻撃を我等より

しりぞ もろもろ うれしい われら とお たま われら なんぢ ひとつ けんご たの いかり
退け、諸の憂苦を我等より遠ざけ給え、我等は爾を一の堅固なる恃むべき錨と

たも なんぢ てんたつ え ちよさい ねが われらなんぢ よ もの はぢ こうむ
して有ち、爾の轉達を得たればなり。女宰よ、願わくは我等爾を呼ぶ者は耻を蒙ら

すみやか わ せつ いのり かな たま けだしわれらちゆうしん なんぢ よ ちよさい しゅう
ざらん、嗚に我が切なる祈を應え給え、蓋我等中心より爾に籲ぶ、女宰、衆

じん たすけ よろこび おおい われら たましい すくい もの よろこ
人の佑助と、歡喜と、庇護と、我等の靈の拯救なる者よ、慶べ。

奉神者シメオンの祝文 しゅさい いまなんぢ ことば したが なんぢ ぼく ゆる あんぜん ゆ
主宰よ、今爾の言に循いて、爾の僕を釈し、安然として逝か

けだしわ め なんぢ すくい み なんぢ ばんみん まえ そな もの こ いほうじん てら
しむ。蓋我が目は爾の救を見たり。爾が萬民の前に備えし者なり、是れ異邦人を照

ひかり およ なんぢ たみ さかえ
すの光、及び爾の民イスライリの榮なり。

聖三祝文 せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に。アミン。

しせいさんしゃ われら あわれ しゅ われら つみ いさぎよ しゅさい われら あやまち ゆる
至聖三者よ、我等を憐め。主よ、我等の罪を潔くせよ。主宰よ、我等の愆を赦

せい もの のぞ われら やまい いや たま ことごと なんぢ な よ
せ。聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給え。悉く爾の名に因る。

しゅ あわれ しゅ あわれ しゅ あわれ
主、憐めよ。主、憐めよ。主、憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に。アミン。

てん いま われら ちち ねがわく なんぢ な せい なんぢ くに きた なんぢ むね てん
天に在す我等の父よ、願は爾の名は聖とせられ、爾の国は來り、爾の旨は天

おこな ごと ち おこな わ にちよう かね こんにちわれら あた たま われら
に行わるるが如く、地にも行われん。我が日用の糧を今日我等に與え給え。我等に

おいめ もの われらゆるごと われら おいめ ゆる たま われら いざない みちび なおわれら
債 ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給え。我等を誘に導かず、猶我等

きょうあく すく たま
を凶悪より救い給え。

司祭) けだしくに けんとう こうえい なんぢちち こせいしん き いま いつ よよ
蓋國と権能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。



【 主日の發放讃詞 第4調 】

しゅのおんなで しは ふくかつのひかるおと
主女弟子 父 復活の光 音
づれを てんしより ききうけえ て、
天使 聞 受
げんそよりの ていざいをふる いすて、しと
原祖 定 罪 振 棄 使徒
にほこりてい え り、しはほろぼさ
誇 曰 死 滅
れ、ハリストスか みは ふくか つして、せかいに
神 復 活 世界
おおいなる あわれみを たま え り。
大 憐 賜

【 生神女讃詞 第4調 】

こうえいはちちとことせいしんにきいす、
光榮 父 子 聖神 歸
いまもいつもよよに、アミン。
今 何時 世世

これこそいよりかくされて、てんしらに
 是古世隠天使等
 もしられざるひみつなり、しょうしんぢよよ、
 知秘密生神女
 なんぢによりてかみはこんぜざるごういつをもって
 爾藉神混合一以
 みをとりにて、ちにあるものにあらわ
 身取地在者現
 れ、あまんじてわれらのためにじゅうじかを
 甘我等爲十字架
 う受け、これをもってはじめにつくられ
 受此以始造
 しものをふくかつせしめて、われらのた
 者復活我等靈
 ましいをしよりすくいたまえり。
 死救給

司祭) ^{かみわれら たのみ}ハリストス神我等の侍よ、^{こうえい なんぢ き}光榮は爾に歸す、^{こうえい なんぢ き}光榮は爾に歸す、

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも
 光榮父子聖神歸今
 いつもよよに、アミン。しゅあわれめ、しゅ
 何時世世主憐
 あわれめ、しゅあわれめよ、ふくをくだ
 憐主憐福降

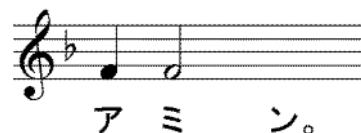


せ。

司祭) 死より復活せしハリストス我等の眞の神は、其至淨なる母、光榮にして讚美たる聖

使徒、克肖捧神なる我諸神父、(某)及び諸聖人の祈禱に因て我等を憐み給

わん。善にして人を愛する主なればなり、



【 萬壽詞 】

か み よ 、 わ が く に の て ん の う 、 お よ び
 神 我 國 天 皇 及

く に を つ か さ ど る も の 、 わ れ ら の ふ し ゅ
 國 司 者 我 等 府 主

き ょ う ダ ニ イ ル 、 だ い し ゅ き ょ う セ ラ フ ィ ム 、 お よ び
 教 大 主 教 及

こ と ご と く の せ い き ょ う の ハ リ ス テ ィ ア ニ ン ら を 、
 悉 正 教 等

い く と せ に も ま も り た ま え 。
 幾 歳 護 り 給 え